

英国の大学に見る 国際ネットワークに関する取組

社団法人国立大学協会総務部副部長 織田 雄一

本年二月に、ブリティッシュ・カウンシル（以下「BC」と表記する）及び日本学術振興会（以下「JSPS」と表記する）の主催でロンドンにて開催された日英学長会議には、日本側一六大学、英国側一八大学から計約九〇名の出席があり、双方で闊達な議論が展開された。そして、その成果をフォローアップするため、BCの主催で本年七月に、日本の一三大学の国際交流担当者等が参加した英国大学視察訪問が実現した。筆者はこの訪問の企画段階から関わったこともあって、運良く同行の機会を得た。この視察訪問は、一週間の日程で英国内で積極的に大学の国際化や留学生獲得に向けた取組を展開する様々なタイプの大学（五大学）を訪問し、それぞれの大学の留学生担当者によるブリーフィング、関連施設の視察のほか、マンチェスターにあるBC教育部本部やJSPSロンドン研究連絡

センターでのブリーフィングも含み、連日朝早くから夜のレセプションまで濃密なスケジュールで、参加者は訪問大学の国際化戦略や留学生受入れに関し多くのことを学ぶと同時に、持参した自大学の資料等を基に今後の大学間交流展開のきっかけ作りを積極的に図っていた。

一 訪問大学の概要

(一) サセックス大学
英国の南岸にあるリゾート地ブライトンにあり、全学生数は一万五六三人で、うち留学生は二五二一人と全体の二三・九%を占めている。

(二) ロンドン大学 東洋アフリカ学院(SOAS)
ロンドン大学の一枚で一九一六年創立、英国の高等教育機関の中で唯一アジア・アフリ

カ・中近東研究を専門とし、学生数は約三七〇〇人、うち三〇%が留学生であるほか、世界中で一〇〇人以上の学生が通信教育で学んでいる。

(三) アストン大学
英国第二の都市バーミンガムに位置し、学生数は九〇五九人、うち学部七三三六人、大学院一七二三人、留学生は一八六二人と全体の二一%を占める。学生の七割はサンドイッチプログラムか海外留学を経験している。

(四) ノッティンガム大学
ロンドンの北西約二〇〇kmのノッティンガム市にあり、六学部、七研究科を有する総合大学で、全学生数約二万六千人、留学生数は四一カ国から約七五〇〇人となっている。

(五) リーズ・メトロポリタン大学
英国の中部にある都市リーズにあり、約二万五千人の学生のうち約一二%が留学生で出

身国は一九カ国にもよる。

二 英国の留学生政策

二〇〇六年四月、ブレア首相は国際教育に関する五年間の戦略「Prime Minister's Initiative II (PMII2)」を発表した。これは一九九九年に発表されたPMII1の成功を基盤とし、国際教育分野における世界のリーダーとしての英国の地位を確保するとともに、英国の国際教育の発展のために打ち出されたもので、具体的な目標として、①二〇一一年までに留学生数を高等教育七万人、継続教育三万人の計一〇万人さらに増加させる、②英国への留学生数が一万人以上の国の数を二倍にする、③英国への留学満足度を高める、④英国と諸外国との間のパートナーシップ数を大幅に増加させることを掲げ、特にインド、

中国との交流促進をうたっている。そして、この実現のため、年間七〇〇万ポンド以上の予算が計上されており、本視察訪問も、こうしたパートナー作り促進の観点から当該予算を元にして実現したものである。政府をあげての国際ネットワークづくり支援は、英国の大学への大きな援助となっている。

三 訪問から見た英国の大学の国際ネットワークキング

(一) プレゼンスとコミュニケーション
当たり前なことであるが、この「プレゼンス」を高め「コミュニケーション」を図ることとはネットワークキングの基本であり、訪問した各大学でも非常に重視されている。

例えば、ノッティンガム大学では国際室の全室員三十八人のうちの二人をリクルート部門に配属させ、欧州、インド・北米、中東・東アジア・パキスタン・バングラデシュ、サハラ以南のアフリカ、北アフリカ・中米というように担当を明確に分けている。年間一〇、一二週を担当地域への出張に充て、一回の出張は二週間を上限に、帰国したらずぐに次の出張と頻繁に出かけていく。ただし、ビジネススクラスの使用は八時間以上のフライトの場合のみ、現地に到着したその日から活動開始出張に合わせて前後に休暇を取って観光等をする事は禁止など、経費面や効率面も徹底している。訪問先には高校や大学のほかBC、大使館、相手国の政府機関なども含まれ、現地

での幅広いネットワークキングに心がけている。サセックス大学でも同様に担当地域を決め、教職員五人のグループで年間三回は担当地域を出張する。担当者は担当地域のみしか行かない徹底ぶりである。

このように、頻繁に担当地域を訪問することで大学の知名度をあげ、やがて大学のブランドを形成し、そのブランドに憧れて留学生が集まるといふ一連の過程を各大学は実践している。そして、この推進の中心は教員ではなく職員であることも、注視すべきことであろう。今回我々にプレゼンしてくれた職員は日頃から留学生をはじめ外国人と接することが多いせいかとともわかりやすい英語で話しかけ、時にはエンターテイナーのような人もおり、とても熱心で印象が良く、こうした経験豊富で能力のある職員の配置は、重要なキーポイントであると確信した。

(二) パートナー選びとランキング

英国の大学はともランキングに左右されている。タイムズをはじめ各新聞社が、教育研究に関するもののみならず組織に関するもの、学生の満足度など様々なランキングを提示している。そして各大学はそれをむしろ上手く活用しているように思える。なぜなら訪問したどの大学とも冒頭の大学紹介の中に、「うちの大学の〇〇分野は英国第一位である。」という調子で話題としていたからである。サセックス大学では「丁寧にもタイムズ



ブリティッシュ・カウンシル教育部本部にて

の世界大学ランキングを資料として配布し、サセックス大学は昨年一三〇位だったのだが、わざわざマーケティングがしてあった。ランキングに関してはその指標の取り方などいろいろと議論があり、筆者も礼賛するつもりはないが、海外の大学について何がその大学の強みか知る時には便利なことは否定できない。

特にアストン大学は、近年このランキングを急上昇させている大学の一つで、ランキングやネームバリューの重要さを最初に説き、成功の秘訣はトッププログラムの提供であると強調していた。留学中の日本人学生二名が昼食会に加わったが、そのうちの一人は、アストン大学に留学を決めた理由についてMBAプログラムがとても優れていることを自信に満ちた口調で語った。大学の説明では学生の就職にも力を入れ、学生支援に英国一投資している大学で、就職の満足度ではケンブリッジに次いで英国第二位とのこと。すなわち、良い教育プログラムを提供し学生の満足度を高める努力を続ければランキングも上がり、ひいては良い留学生も集まるというわけである。アストン大学では副学長自ら夜のレセプションが終了するまで我々と時間を共にしてくれたが、これが大学そのものの一体感を強く演出し、この大学の躍進の源と確信した。

同時に、パートナー大学選びにもウェブがフル活用されている。リーズ・メトロポリタン大学では応募してくる学生の質のレベルをチェックするのに在籍大学の情報などを得る

(四) 海外キャンパスの展開

ノッティンガム大学では、マレーシアと中国(寧波)に同大学の学位を授与する海外キャンパスを展開している。うちマレーシアキャンパスは、昔、マレーシアの皇太子が飛行中にノッティンガム大学のキャンパスに不時着したことや、マレーシアの首相がノッティンガムの卒業生であるといった縁もあって、二〇〇五年に首都クアラルンプールの郊外に開設された。現地民間企業とのジョイントベンチャーで、三〇〇人のスタッフのうち学長、学部長など一部の教員以外は現地雇用でまかなっている。学生数は二〇〇九年で三三〇〇人、そのうち一／三はマレーシア以外からの留学生である。中国キャンパスは、ノッティンガム大学の名誉総長が元復旦大学長であることや、中国が二〇〇三年に外国資本が国内に大学を設置することを認めるようになったことが契機となり、二〇〇六年二月に中国最初の外国資本による認可された大学として開学した。中国におけるノッティンガム・ブランド普及の拠点としての役割が期待されている。スタッフはマレーシアキャンパスと状況は同じで、知的資源をノッティンガムが、土地や建物などのインフラ部分は中国(民間資本)が負担している。現在中国では大学新卒者の就職難が社会問題化しているが、この卒業生はなんと就職率九二%とのこと、そ

ためウェブを活用しているとの発言もあった。このことは裏を返せば、海外の大学に選ばれる大学となるためには、英語をはじめ外国語による情報発信を積極的に行う必要があるということになる。選ばれなければ様々な交流は始まらず、次第に国際的に取り残されてしまう恐れがある。

また、英国の大学にとって英語のプログラムの有無は、パートナー選択の決め手となる。サセックス大学では、日本の国際基督教大学と連携しているとのことだが、国際プログラムの提携の際、言語が最も重要なファクターとなり、特に英語のコースが充実しているところが選択のポイントとなると言っていた。英国人学生も、留学先を選択する際に、現在自分が専攻している内容のものの英語プログラムを選択する傾向があるとのことである。逆に、SOASはアジア、中東、アフリカに関する研究と学位プログラムを提供する英国・EU唯一の機関という特異性もあり、また、ポケモンなど日本のポップカルチャーの影響もあって、日本語を学ぶ学生が近年増えていることから、日本のパートナー大学を探しているが、一六／一七人程度の三年生を一年間送り出すことのできる日本の大学を見つけないのは難しいとのコメントがあった。SOASには、二週間集中の教師向けの英語教授法のプログラムが用意されており、英語による授業増を目指す日本の大学にとってはパートナーを結ぶことも可能であろう。

これもノッティンガムの評価を高める一因となっている。いずれのキャンパスも、ドミトリーが完備しているなど、英国に留学するよりも生活費等の費用が格段に安く、しかも本国のノッティンガムの学位を得ることができることから、学生数を伸ばし続けている。また、本国のノッティンガム大学に留学する学生数には影響はないとのこと、なぜなら、主に学生の家計の状況によって英国に行くか海外キャンパスに入学するかを選択する傾向があるとのことである。むしろ、現地での大学のブランドの普及によって、英国に行く学生数もむしろ増えているとの分析である。

リーズ・メトロポリタン大学は、インドのBhopalに今年の九月に海外キャンパスを開設することである。政府(州政府か?)の認可を受けるのに一年かかったとのことであるが、入学定員一六〇人で、現地で二年、英国で二年のコース設定をし、ビジネス、ホスピタリティ、ツーリズム、コンピューティングのプログラムを用意している。同大では在籍する学生に国際的経験を高める工夫を進めており、二〇〇七年に創設されたインターナショナル・ボランティアには一四八人が参加し、費用の半分は大学が負担している。インドをはじめマレーシア、インドネシア、北米、ブラジル、スリランカ等に学生を派遣し、日本の大学では広島大学と提携しているとのことである。来年度以降、インドキャンパス

(三) エージェント等の活用

どの大学も、大学独自の活動に加え、特に留学生の受入れに関してはエージェントを上手く活用している。ノッティンガム大学ではエージェントを通じて留学生が入学した場合、授業料の一〇%を成功報酬としてエージェントに支払っているとのことである。例えば、イラン、ナイジェリアやパキスタンは英国に多くの留学生を輩出しているが、いずれも治安が不安定であり職員を派遣することにはリスクを伴うことから、エージェントを活用して学生のリクルートを展開している。また、中国や中東諸国では、事前の英語学習にエージェントを活用しているとのことである。

サセックス大学では、Study Group (SG) という民間教育会社と二〇〇六年から提携し、正規課程進学前の学生への英語の予備教育等を完全委託している。SGはサセックス大学をはじめ英国の一〇大学と提携しているほか、ニュージーランド、オーストラリア、米国でも事業を展開し、オーストラリアではシドニー大学や西オーストラリア大学といった名門大学と連携している。ただしSGでは連携を密にして常にコミュニケーションを図るとともに、サセックス大学のブランド力を重視して、サセックス大学のウェブからSGのページに入ることができるようになっている。学生に対してはチュータリングに時間をかけ、大学との一体感を重視している。将来こうした連携が日本でも出てくるのか?興味深く話

がインド人学生と英国から派遣される学生のミーティングポイントとして機能することも期待しているとのことであった。

四 最後に

今回の英国の視察訪問大学の選定は、事前にBCが公募をして応募のあった多数の大学から選ばれた大学とのことで、日本の大学に寄せる期待の大きさを感じられる。以前、ある英国人が、ユーラシア大陸を超えて日本に行くことは抵抗があるものの、日本の大学の質の高さにかんがみ、良いパートナーを見つけないと言っていたが、一方で日本の大学も、国際的に「選ばれる大学」となるよう心掛けることが肝要である。大学の国際戦略や留学生支援など、この視察訪問を通じて得たことはとても多く、紙面の関係ですべてを紹介できないのはとても残念であるが、BCのホームページに参加者が協力してまとめた報告書が掲載されており、大学の国際化や留学生受入れに役立つ多くの情報が掲載されていることから、こちらを是非一読されることをお勧めしたい。最後に、このような機会を提供してくださったBCに感謝を申し上げ、本稿を終わりにしたい。

報告書のアドレス
<http://www.britishcouncil.org/jp/japan-pmi-infojapan-report.htm>